

# うたとかたりの対人援助学

## 第27回「障害者の世界を広げるストーリーテリング」

鵜野 祐介

### 1. 日本発達障害学会への参加

2023年11月4-5日、京都教育大学において開催された日本発達障害学会第58回研究大会の自主シンポジウム「障害者の世界を広げるストーリーテリング」に、指定討論者として参加した。

これまで私は、特別支援教育や障害児・者の研究は、ろう（聾）者の手話による語りの文化（以下「手話語り」）を除いて、ほとんど取り組んで来なかった。だが今回、私の主宰する「うたとかたりのネットワーク」に参加しておられるIさんが、所属する兵庫教育大学大学院で受講された授業の担当者・高野美由紀さんをご紹介下さり、シンポ題目のような実践研究があることを高野さんから知らされた。

そこで、聴覚障害児・者と発達障害児・者とは異なる点も数多くあると予想されるものの、もしかしたら意外な接点や類似点もあるかもしれない、勉強になることも多いのでは、と考えて、参加させていただくことにした。

今回のエッセイでは、当日の内容の報告と、この日に戴いた、企画者の高野さんや話題提供者の皆さん（武田博子、有働眞理子、光藤由美子の各氏）が編著者として刊行された『多感覚で楽しむストーリーテリング』（ジアース教育新社）の紹介を中心に、私自身の雑感も交えて、まとめておきたいと思う（以下、敬称略）。

### 2. 企画趣旨 —高野美由紀より—

事前に配布された資料に、高野はこのシンポジウムの企画趣旨を以下のように述べる。

オノマトペ（擬音語・擬態語）を手掛かりに知的障害児と教員の対話の様相を分析することを出発点として、オノマトペを代表とする多感覚（マルチセンソリー）に訴える表現は、知的障害等障害のある児とその場を共有し、児にとって意味のある楽しい学びを展開することに貢献しているこ

とを本学会でも報告してきた。

さらに物語や昔話についてはジェローム・ブルーナー、ブルーノ・ベッテルハイムや小澤俊夫、ストーリーテリングについてはダンカン・ウイリアムソン、藤田浩子、障害者との実践についてはニコラ・グロウブ、野間成之らを参照しながら、企画者や話題提供者は、マルチセンソリーな表現を用いた昔話のストーリーテリングによる学びが、知的障害等障害のある児にとって学ぶ事柄への理解を助け、困難を乗り越え生きる力を培うと考えるに至った。

そして、これまで教育現場を主なフィールドとして、インクルーシブな小学校外国語教育、中学校特別支援学級の英語、特別支援学校高等部の自立活動などを実践し、研究会や著書の出版を通してその普及活動に取り組んできた。

この自主シンポジウムでは、学校教育の枠を越えて、知的障害等障害のある者がマルチセンソリーな表現を用いた昔話のストーリーテリングに参加することの意味を議論していきたい。

今回は、武田博子が卒後の社会自立をふまえた高校生の自立活動において、有働眞理子が障害者のグループ表現活動において、それぞれストーリーテリングの実践を紹介する。また、語り手である光藤由美子はニコラ・グロウブの理念や技法をふまえて、障害者とのストーリーテリングについて話題提供する。

これらの話題提供をきっかけに、人が物語を語ること・聞くことの本質に立ち返り、さらに障害者の社会参加やセルフアドボカシーにどのようにつなげていけるのかについてフロアと共に考えていきたい。

### 3. 話題提供

3名の話題提供の概要を、やはり事前の配布資料より紹介する。

### (1) 武田博子「高校生の『なりたい自分』『夢の実現』につながるストーリーテリング—特別支援教育の自立活動という視点から—」

武田は、重度重複障害から知的障害を伴わない発達障害まで、様々な障害のある児童生徒の教育的支援を行う中で、ストーリーテリングの持つ力を特別支援学校高等部の自立活動に活用してきた。

その経験から高等学校の「通級による指導」という社会人直前の教育の場においてもストーリーテリングを活用できると考え、「あめをふらせたスズメ」「背のたかくなりたいたネズミのはなし」「とけいやさん、いま なんじ」などの昔話や創作された話、わらべうたを扱うことを試みた。

それらの持つ力とその活用方法を自立活動の6区分27項目との関連で整理し、生徒にどのような学びを促すことができるのか、また課題はどのような点にあるのかなどについて論じる。

### (2) 有働真理子「知的障害者の表現活動とマルチセンソリー・ストーリーテリング—共に生きる家族の視点から—」

言語学を背景とする言語教育の研究者である有働は、重度知的障害者の母親でもある。特別支援学校高等部入学後に始めた即興音楽表現活動において、ニコラ・グロウブと光藤由美子が語る「かくや姫」のストーリーテリングとメンバーの即興音楽を協奏させる試みがワークショップにおいて実践されたことがある。

そこでは、音楽性の高いオノマトペ的なことばが身体表現を伴って語られることで、お話の場が鮮やかに印象付けられるだけでなく、それを受けて聞き手が即興演奏として反応・表現しながら語りに参加していく様子が観察された。

音楽と親和性の高いストーリーテリングが知的障害者にもたらす意義について考察する。

### (3) 光藤由美子「障害者とのストーリーテリング—語り手の立場から—」

学部時代には社会福祉を専攻し、英国の大学院修士課程でピアトリクス・ポターの研究を行った光藤は、おはなしを日本語でも英語でも語るストーリーテラーである。

また、英国のエマソンカレッジのストーリーテリング・コースで知り合ったニコラ・グロウブを日本に紹介した経緯もある。ニコラ・グロウブはコミュニケーション・ニーズのある障害者に対して語りの

支援を行う中でその技法を開発し、知的障害者がストーリーテリングを行うチャリティー団体を立ち上げるなど、障害者とのストーリーテリングに関する世界的な第一人者である。

そのニコラから学び、それまで小さい子供からお年寄りまで幅広い年齢層にお話を語る活動を長年してきた光藤は、特別支援学校などで障害者とのストーリーテリングを行うようになった。

語るのに適しているおはなし、マルチセンソリーに語る技術、語りに用いるアイテムなどについて、フロアの方に体験いただけるように語り手の立場から話題提供する。

## 4. 指定討論者（鶴野）からのコメント

それでは、実際に提供された話題の内容に対する私からのコメントを、要約して示しておく。

### (1) 武田への感想

高校通級でのストーリーテリングは、多様な価値観を聞き手に伝えるストーリー（物語）を聞くことで、自己肯定感や自己効力感や主体的な活動意欲が向上させる「エンパワメント」としての意義にあるという武田の主張に共感を覚えた。

今後の展開として、そうしたストーリーの選択肢を増やしていくこと、即ち、話型、時代、日本各地の地域、外国各地の地域・民族など、多様性を探っていくことが期待される。また、特別支援教育の場において特に相応しいストーリーとして、笑い話やオノマトペを使ったリズムカルなもの（例えば、「団子婿」「鳥飲み爺」「猿地藏」など）が挙げられるが、その一方で、楽しい話や「めでたしめでたし」の分かりやすい結末の話だけでなく、不条理なものや怪異なもの（例えば「雪女」「鶴女房（鶴の恩返し）」「子育て幽霊」など）にも拡げていくことが期待される。

### (2) 有働への感想

有働が報告した実践例から、以下の3つのことを想起した。第一に、歌や音声や身体表現の持つ「音楽性」がストーリー（物語）を創出し伝承すること。例えば、「鳥飲み爺」における「チンチン カラカラ ポイポイポイ」、「瘤取り爺」における「トレレ トレレ トヒャラ トヒャラ ストトン ストトン」——、こうした唄や囃し言葉は、繰り返し声に出して体を揺らしながら口ずさむことで、ストーリーを聞き手により届けやすく、また覚えやすくする、「呪文」のような役割を果たすと考えられる。

第二に、語りの場を構成する最も大切な要素は「対話性」だということ。それは、相づち、笑い声、笑顔に始まって、時には溜息や慟哭もあり、そして究極

の「対話」としての、沈黙もある。

第三に、「共生感」ということ。長年、岡山市を中心に活動を行ってきた語り部・筒井悦子が以下のように述べている。「語り手と聞き手がお話の世界を共に楽しみ、時間と空間を共有する時、『共に生きる』という感覚が生まれる。そしてその感覚は、語り手と聞き手との間だけでなく、そのお話を語り継いできた『過去の無数の人々のいのち』との間のものである」（鶴野 2023:196）。

有働たちの実践にも、この「共生感」が息づいていると感じられる。

### （3）光藤への感想

光藤の発表では、ストーリーテリングの歴史を紐解き、現代の英国を代表する3人のストーリーテラー（Duncan Williamson, Taffy Thomas, Nicola Grove）を紹介し、そして彼ら/彼女たちに強い影響を受けて行ってきた光藤自身の語りの活動を紹介した後、本シンポの主題であるマルチセンソリー・ストーリーテリングとは何かについて、具体的に実演してみせた。今回、特に興味を覚えたのは、マルチセンソリー・ストーリーテリングと手話語りとの類似性である。

昨年（2022）5月、仙台市を中心に長年手話語りを行っている半澤啓子にインタビューした。その中で彼女は次のように語っている。「登場人物の演技分けを目線や肩の向きでおこなう『ロールシフト』とよばれる動きによって、誰が誰に言っているのか、音声言語では伝えられないことまで伝えることができる。手話は手指で伝える言葉だと思われがちだが、それだけではない」（鶴野 2023：156）。

2016年、英国スコットランドにおける手話語りの研究で博士号を取ったエラ・リース（Ella Leith）は、これまで口承文芸とは音声言語による伝承としての「声の文化」と捉えられてきたが、そうではなく、ろう者においては、身体表現としての手話言語によってストーリーを伝承してきたことを踏まえて、「身体的・口頭的伝承 [corp-oral traditions]」（同 274）と呼ぶことを提唱した。つまり、ろう者は、聴覚ではなく視覚という感覚によってストーリーを受け取り、伝承している、というのである。

見方を変えれば、聞こえる人（健聴者）も聴覚だけでストーリーを受け取っているわけではなく、視覚も使っているし、さらに、語りの場の匂い、温かさや冷たさ、その時に食べたミカンの味などと一緒に、五感全体を通してストーリーを記憶しているのではないだろうか。

そう考えれば、マルチセンソリー（多感覚）なストーリーテリングという発想は、人類のユニバーサル（普遍的）な営みと言えるように思われる。

それでは、この発想に基づいた方法を用いて、発達障害児・者への実践を行っているグロウブの語りの活動の概要について、前掲の有働他『多感覚で楽しみストーリーテリング』（2023）を参考にして、次節で紹介してみたい。

## 5. マルチセンソリー・ストーリーテリング —ニコラ・グロウブ（Nicola Grove）—

ニコラは、障害を持っている人たちが、物語を通して希望を持って生きていくことをめざして、障害を持っている人のための語りグループ、Open Story Tellers（オープン・ストーリー・テラーズ）を設立しました。様々な感覚機能を使って物語を共有する処方、Multisensory Storytelling（マルチセンソリー・ストーリーテリング）を発案し、実践しています。それは、見る、聴く、話す、匂う、触れるなどといった様々な感覚器官も利用してお話に参加し、立体的にお話を楽しむやり方です（有働他 2023：15-16）。

本書によれば、英国には「マルチセンソリー・ストーリーテリング（Multisensory Storytelling, MSST）」というキーワードの障害者支援があり、二つに大別される。一つは、チャリティー団体 BagBooks が行っている紙芝居タイプのもので、BagBooks では、MSST に使う紙芝居に近い本を作成することから語り手の養成や派遣までやっているという。

もう一つのタイプが、ニコラ・グロウブが開発したもので、「Learning to Tell」とも呼ばれる。小道具や音楽を使うことも多いが、基本的には語り手が聞き手に対して語るストーリーテリングを基本としている。お話を聞くだけでは理解が難しい人にもわかるように、聞く以外の、見る、触る、動くなども含めて、多感覚に提示していく語りである。また、アクティブリスニング、小道具の用意や語りの際に登場人物の台詞を言うなどの役割を担い、お話への積極的な参加、貢献を促す（同 16より要約）。

また、ニコラ型 MSST には以下の4つの効用があると考えられる。

- ・参加の仕方を学ぶ。
- ・楽しむことができる。
- ・自信やコミュニケーション能力を高める。
- ・自分たちの文化の中で大切なお話を共有する。

（同 24）

昔話の語りを聞くことは、障害のある子供たちの発達を促し、生きる知恵を受け、本人に降りかかる様々な課題に対して解決の糸口を見つける手

がかりを与えてくれることでしょう。しかし、耳で聞くお話は目に見えずそこに留まらず消えてなくなるものです。知的障害や自閉症などの障害がある場合、語りだけではお話の内容を理解し楽しむことが難しく、語る際に工夫が必要になります。

マルチセンソリー・ストーリーテリングというのは、多感覚に訴える語りを意味します。語ることはシンプルなイメージしやすいものにして、オノマトペ（擬音語・擬態語）、ジェスチャー、指さし、表情、絵カード、場の構造化など、視覚的あるいは身体的な手がかりを適度に用いたコミュニケーション手段で語るのが、マルチセンソリー・ストーリーテリングなのです。

最近では、「身体化認知 (embodied cognition)」という、高次の認知処理は感覚や動作といった身体の動きを基盤にしているという理論が脚光を浴びてきていますが、マルチセンソリー・ストーリーテリングでは、身体を使ってお話を体感して楽しみ、記憶（例えば、語彙を覚える）や思考（例えば、お話の主人公が経験したことをもとにどうするのが望ましいのかを考える）につなげていくことが期待できます。

また、聞き手も語りの一部（例えば、オノマトペの部分）を担ったり、一緒にジェスチャーをしたり、「次は何か来るのかな」と質問するなどやり取りをしながらお話を進めていくこともでき、参加型、対話型の語りにもなります。この参加型、対話型の語りは、双方向のコミュニケーションとして楽しむことにもつながりますが、子供たち自身の語り手になる入り口にもなります。子供自身が語り手になるということは、人にお話を伝えるコミュニケーション力を手に入れることであり、特に障害のある子供にとっては大事なことだと考えています（同 53-54）。

## 6. ユニバーサルデザインとしてのうたとかたりと遊びと演劇

私自身、2014年頃から「ユニバーサルデザインとしてのうたとかたり」について考えてきたが（鶴野 2023：17-25 参照）、今回出会った「マルチセンソリー・ストーリーテリング」は、ユニバーサルデザインの発想を具体化させた実践であることが分かった。

有働他（2023）にも、障害の有無にかかわらず教育を受ける権利や機会を保障されるインクルーシブ教育のシステム構築のための環境づくりとして、ユニバーサルデザインが重要と指摘する（同 51）。

2006年に国連で採択され、2008年に発効されて、日本でも2014年に批准した「障害者の権利に関する条約（障害者権利条約）」には、以下のように記されている。

（第二条）「……『ユニバーサルデザイン』とは、調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう。……」

（第四条）「(f) 第二条に規定するユニバーサルデザインの製品、サービス、設備及び施設であって、障害者に特有のニーズを満たすために必要な調整が可能な限り最小限であり、かつ、当該ニーズを満たすために必要な費用が最小限であるべきものについての研究及び開発を実施し、又は促進すること。……」（外務省HPより）

このような理念は、障害児・者に対してだけでなく、乳幼児から高齢者まで年齢を越えて、また使用する言語の違いや、性別や民族の違いを超えて、すべての人びとに適用されるべきものだと考えられる。

そして、伝承童謡（わらべうた）や、昔話をはじめとする民間説話（民話）の中には、ユニバーサルデザインの理念に合致するものがたくさんあると思われる。さらに、子どもの伝承遊びや演劇にも、ユニバーサルデザインの観点からみて非常に意義深いものがあると感じているが、これらにもやはり「マルチセンソリー（多感覚）な表現行為およびコミュニケーション手段」という共通点がある。そのことに、今回のシンポジウムを通して気づくことができた。

最後に、今回のシンポジウムに参画された皆様に紙面をお借りして御礼を申し上げます。

### <引用文献>

- ・有働真理子、高野美由紀、光藤由美子編『見て、聞いて、触って、動いて 多感覚で楽しむストーリーテリング —心豊かな学びと支援—』シアース教育新社 2023
- ・鶴野祐介『うたとかたりの人間学 いのちのバトン』青土社 2023

